注目の

「中央かるた会」高まる競技かるた熱

百人一首のかるたを取り合う「競技かるた」が、俄然（がぜん）注目を集めている。中央大学「中央かるた会」はことし３月の第102回全国職域学生大会・団体戦Ｂ１級で全国６位の実力チーム。凛とした、はかま姿からは想像もつかない激しい動きもあり、「畳の上の格闘技」とも言われている。中大競技かるたの活動を追った。

実戦さながらの練習風景、左から御所名さん、森田さん＝多摩キャンパスCスクエア

押し寄せる新入生

競技かるたを題材にした人気漫画「ちはやふる」（末次由紀著＝既刊31巻、連載中）と、漫画の実写版映画「ちはやふる上の句・下の句の２部作」（主演・広瀬すずさん）が大ヒット。

中大多摩キャンパス・新入生歓迎の各サークル紹介でも、中央かるた会への関心が高まっていた。“新歓”活動見学には大勢の新入生が押し寄せ、なかにはフランス人男子留学生の姿も。

同会のリーダー、森田美乃莉さん（文３）と山崎華恵さん（文２）が試合形式の練習を披露した。試合着も練習と同じようにジャージーなどの動きやすい服装だ。和装・はかま姿は全国選抜大会（会場・明治神宮）など特別の試合で義務づけされる。

競技かるたは百人一首の上の句を聞き、相手より先に下の句が書かれた札を取る。読みあげられる上の句、例えば『たごのうらに　うちいでてみれば　しろたへの』を聞き、場（畳）の上に並べられた下の句の札、『ふしのたかねにゆきはふりつつ』に手を伸ばす。中央かるた会が勧誘チラシで紹介した歌人・山部赤人の一首だ。

公式戦の試合札は百人一首全100枚のうちの50枚。読まれた歌が場にない場合もあるため、競技者は百首全てを覚えていることが前提条件となる。

場に向かって対面する森田さんと山崎さん。それぞれに体重のかけ方が違う。陸上競技の短距離種目を中学時代に経験した森田さんのスタイルは、つま先だてたクラウチングスタートのよう。山崎さんはバランスを重視している。

取る際に時として、体重移動による大きな動きとなり、札が勢いよく飛んでいく。練習場で借りている多摩キャンパスＣスクエアの５階和室。障子の下部分を座布団で保護して、札で障子紙を破らないようにしてあった。

全日本かるた協会によると、かるたはおよそ800年前から庶民に親しまれてきた。かるた人口は約100万人。競技かるたは100年以上も前の1904（明治37）年に始まり、現在は名人位、クイーン位決定戦を男女それぞれの頂点にして、主要大会の開催は全国各地で年間60回超にもなる。

競技者は実力によって、Ａ級・四段以上、Ｂ級・二～三段、Ｃ級・初段、Ｄ級・無段、Ｆ級・初心者と位置づけられる。

中大勢は、森田さんと御所名佑梨子（ごしょなゆりこ）さん（法２）がともにＢ級、山崎さんがＣ級だ。

学生の主要大会には、前述の全国職域学生大会と全国学生選手権が毎年３月末に立て続けに行われる。

全国大学かるた連盟の加盟校は63大学。競技人口増に伴い、年々、参加校が増えている。

◇

中央かるた会のメンバーに、競技かるたを始めたきっかけを聞いた。

森田さん

「高校に入学し、中学時代同様に陸上競技を続けようと思いました。しかし、もともとのけがなどを理由に陸上を断念しました。時間に余裕ができて、何かしたい、と考えていたとき、中学のころに読んでいた漫画『ちはやふる』を思い出し、百人一首を覚えよう、と。古典に興味があって、大学では国文学専攻です。高１の冬、校内のかるた大会に出場。競技かるたではありませんが、それなりに札を取れるだろうと思っていたら、一人勝てない女子生徒がいました。勝ちたい、もっと札を取りたい気持ちが競技かるたを始めたきっかけです。高２で同好会を立ち上げ、ことしで競技歴４年目です」

御所名さん

「中学・高校とバトントワリング部でした。クラシックなど音楽も好きです。大学では何をしようかな、と“新歓”をいろいろ見ていると、めっちゃかわいい、はかま姿が。漫画『ちはやふる』を読んでいました。私は奈良出身で、日本独特の文化に触れたいと思っていて。かるたに興味を持ち、“新歓”見学で実際に札を払ったとき、激しい動きになりました。すごく汗をかいて、体を動かすのはこれで十分かな。日本人らしさはど

こへいったのかとも思いましたが、すぐに入部しました」

山崎さん「都内の親戚宅を訪ねた高校３年の４月、多摩キャンパスを母と見学しました。ペデ下の学生掲示板を見て、忍者サークルとか、いっぱいあるねと感心し、近くに競技かるたのチラシを見つけました。中学のころから、漫画『ちはやふる』を読んでいて、競技かるたを知り、私もやってみたい。そう思っていたのですが、受験勉強や交通アクセスなどで続けられませんでした。中大なら競技かるたができる。かるたが中大入学を決めた理由の一つです」

――競技かるたを続けてきて、よかったことは何ですか。

森田さん「かるたは競技人口の幅が広く、各地域のかるた会では、子どもから年配の方までかるたを楽しんでいます。大学を卒業してからも続けられる。多くの方とかるたを通して交流できます。私は陸上競技歴より長くなりました」

御所名さん「かるたをしていて、大学生活がとても充実しています。自分がやりたいことに全力を尽くす性格で、大会で悔しい思いをするともっと頑張らなくちゃ、と思う。大学卒業後に『大学ではかるたを一生懸命していました』と言えます」

山崎さん「去年の冬、大会が３週連続であって、最終週も出場するか悩んでいました。いずれも地方開催です。参加料や交通費もかかります。母に相談すると『かるたを一生懸命できるのは学生のときだけ。社会人になったら忙しくなりますよ。行ってらっしゃい』と応援してくれました。母は何気なく言ったのだと思いますが、私は感動しました。母は私が中学時代から、かるたをしたいという気持ちを知っています。その最終週の試合で昇級しました。行ってよかったです。母に感謝しています」

◇

練習中は専用アプリが読み手代わりだ。その都度、森田さんがアプリの操作のために立ち上がる。気分が一新される。場の札を見つめるメンバーたちの表情がより真剣に。

上の句『ちはやぶる～』が読み上げられる。この時点で「はいっ」という元気のいい声が出る。本来は『～

―― 競技かるたのルール ――

© http://www.karuta.net/

かみよもきかず　たつたがは』と続くのだが、競技かるたは瞬発力と反射神経、そして暗記力が求められる。札を取るか取られるかは一瞬の出来事だ。

一瞬のために百首をこつこつと覚える。似ているようで違う札も多数ある。素早く札を取るための体重移動にも工夫をこらす。

静と動が織りなすドラマの数々。相手との戦い、自らとの闘い。競技者をとりこにする「競技かるた」の醍醐味がここにある。

中央かるた会の新歓シーン。左から遠藤さん（法２）、御所名さん（法２）、森田さん（文３）。机上には話題の漫画「ちはやふる」があった＝多摩キャンパス

からくれなゐにみつくるとは

こうした試合中の失敗が発奮材料となる。上の句の読み始めで、6文字まで同じという要注意の札が3つある。一例が「きみがためは～」「きみがためを～」。競技者は一文字一文字に耳をそばだてる。

札を聞き間違って手を出す「お手つき」は、勝利への気持ちが空回りしたときのもの。「私、読まれたら、すぐに突っ込んでいましたから、お手つきはいっぱいあります」。また札を取って満足していると、周囲から「それ、違うよ」と指摘され、失敗だったことに気付く。

メンバーが明かす失敗談だ。上の句が読まれる前の数秒間、場は静寂に包まれる。そのとき、おなかが鳴った。「グー」。試合中の相手が驚き、自分はもっとびっくりした。「なんでこのタイミングで鳴るの!?」